

形而上学的分析と言語的分析： ケンブリッジ分析派、論理実証主義、オックスフォード分析派

笠木雅史（名古屋大学）

要旨

「分析哲学」と呼ばれるタイプの哲学の主題や方法をどのように特徴づけるのかは難しく、そもそも特徴づけが可能であるのかどうかさえも自明ではない。20世紀によく耳にした分析哲学の特徴とは、「G. Fregeによる論理学の革新を受け B. Russellや G. E. Mooreが発展させた、哲学的問題を言語的分析という方法によって解決ないし解消を目指す英語圏を中心とする哲学分野」といったものではないだろうか。この分析哲学の方法論的特徴づけは、哲学の主題から形而上学的問題を排除し、言語についての問題に限定するという主題的特徴づけと共に理解されてきた。しかし、これらの特徴づけは主題、方法が多様化した現代の分析哲学には当てはまらないだけではなく、歴史的にも正しくないと思える理由が存在する。本発表は、ケンブリッジ分析派、論理実証主義、オックスフォード分析派という3つの立場を比較しつつ、分析哲学の方法論と主題を巡って1930年代から50年代までにイギリスで展開された議論を概観することで、分析哲学が当時から内包していた多様性を明らかにすることを目的とする。

分析哲学の方法とされた「分析」という名を冠し、今日まで存続する雑誌 *Analysis* は1933年に、A. E. Duncan-Jonesを編者とし、L. S. Stebbing、C. A. Mace、G. Ryleとの共同で創刊された。創刊号の筆頭に掲載されたその編集ポリシーの宣言では、「出版される原稿は主に、公共の同意によってその一般的本性がすでに知られている諸事実ないし諸事実の集合の解明ないし説明に関わるものとなる」と述べられている。ここでは「分析」が、言語ではなく事実の解明ないし説明という意味で用いられている。そして、*Analysis*の創刊から数年間は、この雑誌を中心として「分析とは何か」という論争がイギリス哲学界で活発に展開されることになる。この論争で中心的な役割を果たしたのは、*Analysis*の創刊者の一人であり、イギリス初の女性哲学教授となった Stebbing である。Stebbing、John Wisdom たちは Moore の強い影響のもとで、「ケンブリッジ分析派」と呼ばれたグループを形成した。ケンブリッジ分析派は、ある言語表現を他の言語表現で置き換えることによって進む言語的分析と事実からより基礎的な事実へと進む形而上学的分析を区別し、後者の可能性を追求した。*Analysis* 創刊時の編集ポリシーには、Stebbing によるこの哲学観が色濃く反映されている。

Stebbing はまた、当時ヨーロッパ本土で台頭した論理実証主義にも強い関心を持ち、R. Carnap を1934年に初めてイギリスに招待した人物であるだけでなく、論理実証主義者たちの学会 International Congress for the Unity of Science の組織委員会に名を連ねた唯一のイギリス人である。パリで1935年に開催された第1回学会にも参加し、ケンブリッジで開催された第4回学会では開会講演を行っている。Stebbing は、論理実証主義の掲げた哲学からの形而上学的排除に反対し、論理実証主義の哲学方法論である論理的構築や意味の検証原理についても、批判的検討を加えた。

第二次大戦後に拡張が進んだオックスフォード大学に Ryle を中心として集い、50年代に最盛期を迎えた、新しいタイプの言語的分析を展開しようとしたグループは、今日では「日常言語学派」と呼ばれるが、当時は「オックスフォード分析派」と呼ばれた。これは「ケンブリッジ分析派」と対比されたためである。オックスフォード分析派は、Moore に由来する常識ないし日常言語への着目という観点をケンブリッジ分析派と共有したが、論理実証主義と同様に形而上学的分析ではなく言語的分析こそが哲学の課題だとした。さらに、オックスフォード分析派は、ケンブリッジ分析派が強調した還元主義を否定し、概念間の関係を総合的に描き出すものとしての言語的分析を提唱したのである。